

# Juichi WAKISAKA Race Report

2012 AUTOBACS SUPER GT -Round 4 SUGO GT 300km RACE-

◆◆ 緻密な戦略をもとに、2戦連続の4位入賞を果たす！ ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	9位	4位

開催日：2012年7月28日-2012年7月29日

サーキット：スポーツランド SUGO（宮城県仙台市、コース全長：3.704 km）

レース距離：81周（300.024 km）

入場者数：予選日9,500名、決勝日：27,500名 合計：37,000名

今シーズンの前半戦最後の戦いを迎えた SUPER GT。第4戦の舞台はみちのく・仙台、スポーツランド SUGO。アップダウンの多いテクニカルコースである SUGO の決勝レースでは、81 周先のフィニッシュを目指し、厳しい暑さの中で激しい攻防戦が繰り広げられた。今回、予選を9番手で通過した No.39 DENSO KOBELCO SC430 は粘りある走りで着実にポジションアップ。終盤は激しい攻防戦を展開しつつ、2戦連続となる4位でチェックeredフラッグを受けることに成功している。



## ■ 7月28日(土)

08:15-10:15 公式練習

13:05-13:20 公式予選1回目(Q1)

15:30- スーパーラップ

### 【公式練習】 9番手 / 1'16.587

土曜日の朝にスタートした公式練習。午前8時15分から2時間の走行枠が用意され、終盤にGT300、500のそれぞれクラス別で各10分の専有走行が設けられた。梅雨明け間もない東北地方とはいえ、すでにこの時点で気温は33度を超え、路面温度は39度と真夏日の幕開けとなる。No.39 DENSO KOBELCO SC430にはまず石浦宏明選手が乗り込み、クルマのセット確認から始め、徐々にタイムアップ。1分16秒819のタイムをマークし、一時は3番手につけた。

その後、クルマは脇阪へと委ねられ、セッティングの調整作業を丁寧に行う。脇阪によると、「クルマの方向性を見極めるために、いいところと悪いところを明確にしていった」とのこと。この後、再度石浦選手が出走してセットを改めて確認し、GT300との混走枠を終了する。そしてGT500の専有走行では、ニュータイヤを装着して脇阪がコースイン。1分16秒587とチームベストを更新する走りを見せ、9番手でセッションを終了することになった。



### 【公式予選1回目】 9番手 / 1'16.338

今回の予選方式も前回同様のスーパーラップを採用。まずは予選1回目(Q1)でトップ10台の中に残ることが目標となる。まず、ここでNo.39 DENSO KOBELCO SC430のアタックを務めたのは脇阪。気温34度、路面温度に至ってはなんと58度という大変厳しい暑さの中、午後1時5分からのセッションに挑んだ。

じりじりと強い日差しがコースを照りつける厳しい暑さの中、一斉にクルマがコースに向かうかと思いきや、ピットから出てくるクルマは皆無。この時点からライバルの動向を強く意識してしばし様子見となったが、15分間のセッションで残り時間が7分を切ると、次々とクルマがピットを離れていく。脇阪も同様にコースイン、計測3周目にベストタイム1分16秒338のタイムを叩き出す走りを見せ、最終的には9番手でQ1を終了。60kgという重いウェイトハンデの中、見事スーパーラップ進出を決めた。



### 【スーパーラップ】 9 番手 / 1'16.294

スーパーラップは、午後 3 時 30 分に GT500 クラスがスタート。気温も路面温度もやや下がり、32 度、路面温度 42 度のコンディションの中、石浦選手が 2 番目にコースイン。集中力を切らすことなく、攻めのアタックを行って 1 分 16 秒 294 をマーク。残り 8 台の走りを待って、No.39 DENSO KOBELCO SC430 は 9 番手のポジションを獲得することになった。

朝の練習走行時から、積極的にセットアップ作業を続けてきた No.39 DENSO KOBELCO SC430。脇阪によると、鈴鹿サーキットで行われた事前テストではあいにく両日ともに雨のコンディションとなってしまったため、SUGO に向けて試したかったメニューが思うように消化できず終わっているとのこと。だが、「大きく進化、進歩させたいものがあった、それを鈴鹿でトライしていました。ただ、雨のため、クルマを完璧な状態へと仕上げることはできずに終わっています。しかしながら、期間中はできるだけ多くの情報を収集し、その中からいいものをここに持ってきました。実際のところ、使えるものとそうでないものがあったし、クルマとしてはまだまだ厳しい状態でしたが、それを練習走行時にある程度いい状態へと調整し、ニュータイヤでの確認までもっていくことができました」と、厳しい条件の中でも、ベストを尽くせたとしている。また一方で、「クルマの現状を考えると、今回の予選順位は僕らのポテンシャルを反映した結果だともいえる」と厳しい表情も見せたが、「与えられた環境の中で、ある程度クルマを仕上げるのができた。レースともなると、ポテンシャルとは異なる部分の要素が絡んでくるため、そういうときこそ僕らの強さをしっかりとアピールしたい」と健闘を誓った。



### ■ 7月29日(日)

09:05-09:50 フリー走行

14:00- 決勝 (81周)

## 【フリー走行】 5番手 / 1'17.124

決勝日の朝も、前日同様の快晴に恵まれ、強い日差しがサーキットを照りつけた。午前9時5分からのフリー走行は、気温31度、路面温度は38度と前日よりやや心持ち低い数値ではあったが、決勝レースが厳しい一戦になることを十分に感じさせる暑さだった。

No.39 DENSO KOBELCO SC430 はまずガソリン満タンの状態でコースへ。早々にマークしたタイム、1分17秒124で一時暫定トップに立つこともあったが、まずは決勝用のセット確認および調整に特化する。終盤、一時赤旗中断という事態にもなったが、チームへの影響はなく、その後も順調に決勝を見据えた好タイムを刻み続け、45分のセッションを5番手で終了した。



## 【決勝】 4位 / 8ポイント獲得（シリーズポイント：38ポイント、シリーズランキング：2位）

午後2時からの決勝に向け、着々と準備が進む中、ピットロード上ではSUPER GT恒例のピットワークを実施。ところがにわかには雲行きが怪しくなり、風を伴いポツポツと上空から雨が落ちてくる。結局のところ通り雨ではあったが、かなりの雨量となり、路面はあっという間にウェットコンディションに。結果、決勝前に設けられた8分間のウォームアップ走行ではレインタイヤを装着する事態となってしまった。

No.39 DENSO KOBELCO SC430 では石浦選手がレインタイヤを着けてコースイン。慎重にクルマのセットアップを最終確認し、スタートを迎えることになる。幸いにしてスタート前のダミーグリッドに全車が揃った時点では、すっかり路面も乾き、ドライコンディションへ。ただ、雨の影響を受けたのか、気温は32度、路面温度は42度まで下がることとなった。

ローリングラップを経て81周にわたる激闘がスタート。直後に上位2台が1コーナー進入で絡むアクシデントが発生するが、No.39 DENSO KOBELCO SC430 のスタートを担当した石浦選手は周囲との攻防戦を制して7番手でオープニングラップを終了する。そしてタイヤに十分熱が入ると、次第にペースアップ。あっという間に6番手に浮上し、周回を重ねていった。

序盤こそ、前後車両とは僅差での走行だったが、コース幅が狭くタイトなコースレイアウトのSUGOゆえ、逆転へと持ち込むことは非常に難しい。さらにGT300の周回遅れを処理する作業が伴うために、次第に互いの間隔が開いてくる。だが、粘り強い走りをつねに前方を追い続け、37周終わりでピットへと戻った。

35秒ほどでピット作業を終え、コースに向かった脇阪。これに先立ち、脇阪はチームスタッフと共に、石浦選手の走りやライバルのペース配分などを確認。後半戦の戦いをいかに組み立てるか、十分なシミュレーションを行った。結果、それが功を奏し、力強く、そして安定したペースで周回を刻んでいく脇阪。コースイン直後から差を詰めていた35号車を41周目にパスして5番手へと浮上すると、今度は立川祐路選手がドライブする38号車との差をぐんぐん詰めていく。互いに手の内を知り尽くした者同士の行き詰まる攻防戦は、SUGOを訪れた観客が真夏の暑さを忘れるような好バトルとなった。

そして迎えた50周目。その前の最終コーナーからメインストレートで38号車に詰め寄っていた脇阪は、1コーナー飛び込みで満を持しての逆転劇を披露！4番手に浮上すると、次の目標を1号車に定め、さらに猛プッシュ。52周目にはコンマ1秒差まで詰め寄ったが、軽いウェイトハンデである1号車の方が明らかにポテンシャルが高く、しだいにそのギャップは開いていき、逆転には至らず。このまま4位でチェックカードフラッグを受けた。

セパンに続き、4位入賞を果たしたNo.39 DENSO KOBELCO SC430。シリーズランキングは3位から2位へと浮上。ランキングトップの38号車との差は僅か6ポイントと好位置につけている。次の舞台は鈴鹿1000km。久々の長丁場、しかもナイトセッションはなく、日中の厳しい暑さが過酷な条件に加わってくる。チャンピオン争いを考慮すると、チーム総力戦となる次戦では、さらなる飛躍を目指したいところだ。



決勝日に誕生日を迎えた脇阪。「今日は自分らしいレースがしたかったことありますが、結果自体も、今の自分たちができるベストリザルトを残すことができましたと思います。また、震災からは時間が経ったとはいえ、まだ東北地方では厳しい状況が続いています。ここ菅生で今日の僕たちのレースを見たお客さんに喜んでいただけるような戦いができたことには満足しています」と笑顔を見せた。しかし、「戦略が思うように進んだことは、チームとしての頑張りがとても大きいと思います。でもクルマとしては進化した部分がある一方で、ガマンしなければいけない部分があるなど、まだやるべきことも残っています。それが今後解決していけば、ウェイトを搭載しても十分上位で戦えるようになると思うので、後半戦はそのような状況でレースがしたいですね」と気を引き締めることも忘れなかった。

さらには、38号車との攻防戦に触れ、「立川選手とのバトルはやはり楽しかったですね。抜いたあとも彼は果敢に攻めてきたし、走りの駆け引きだけでなく、心理戦での戦いがとても面白かった」と満足な様子だった。その中で、チャンピオン争いを繰り広げる38号車、そして100号車の前でレースを終えることができたこともよかったと、激戦を振り返った。

また、シリーズ後半戦も踏まえ、「今回、与えられた条件の中でいい形でレースを終えることができたのは良かったです。次の鈴鹿を前に富士での公式テストがあるので、ここでポジティブな要素を見つけることができれば、さらにポテンシャルも上がると思うの

で、そこに期待しつつ、自分たちはいまの良いモチベーションをキープしながら後半戦を戦っていきたいですね」とタイトル獲得を意識し、さらに上昇することを誓った。

次戦は、8月18日(土)・19(日)に鈴鹿サーキット（三重県鈴鹿市）で開催される。

### 【Photo Gallery】

